村山民俗学会

第 416 号
発 行 日　2026 年 6 月 1 日
発行責任者　相原　一士
編 集 担 当　岩鼻 通明

幸生（寒河江市）を想う

野口　一雄

「西村山地域史研究会報」44 号（令 8.2）に、書評「幸生の郷土芸人 菊池正男の足跡」（高橋敏明）が載っている。

会報 44 号（1990.3）に、3 月 4 日の「幸生の病送り行事」への参加記事が載る。山大教育学部伊藤教室の学生、山北高郷土研究部の生徒らの行事参加だった。菊池正男さんが案内し、終了後菊池さん宅で、郷野和吉さんから幸生鉱山や地区の歴史を伺った。「幸生の病送り行事」への参加記事は、会報 178 号にも「幸生の病（やんまい）送り行事」が載っている。菊地正雄さんには幸生鉱山跡に案内していただいたことがあった。鬼籍に入られて久しい。下の写真は、ありし日の幸生鉱山（銅山）

もうお一人、幸生銅山で生まれ、小学校 4 年生まで暮らした栗田幸助さんを想いだす。栗田さんは本会役員も務めた。手書き自筆本『回想の幸生銅山』（限定 48 部 平成 2 年 1 月 18 日 自筆自装 甲子舎私刊）と『昭和期の幸生銅山』（限定 48 部 平成 3 年 10 月 29 日 自筆自装 甲子舎）を上梓している。

『回想の佐中銅山』に、「病送り（ヤンマイオクリ）」の記述がある。

「奥シミ沢川の橋のたもとに病送りのダンゴを供えるのは極寒の二月八日（旧暦？）であった。それぞれの家ではトロロを食べて厄神を追い払い、ダンゴ木の小枝に家族の数のダンゴを刺したのを母たちが作った。子供たちはトロロを長屋の入口にたらし（厄神の侵入を防ぐのだという）、先の母が作ったダンゴ木をこの橋のたもとに持ちより、大人たちが作った藁人形にさして祈ったものである。（以下略）」

『昭和期の幸生銅山』「はじめに」の記述の一部である。

「（前略）幼なじみの（略）は六年生卒業のあと一年間（略）。（略）は昭和三十六年の閉山まで暮らしたという。（略）いろいろな銅山での生活を沢山語ってくれた。（略）多くの方々からの厚意で多くの資料をいただくことができた（略）特に、『鶴梁文鈔』巻八、慶応三年刊と『永松鉱山の概況（附幸生銅山）昭和十五年刊』の二冊は、山形大学附属博物館の書庫の片すみに眠っていたのを、石島教授が探しだされて（略）。又野口北高教諭が幸生銅山の鉱員たち